

『栄花物語』における朝光の結婚像

川田 康幸

序

閑院左大将藤原朝光については、昨年本学の紀要において一部拙論を展開した^{註一}。そこでは以下の二点を「栄花物語」の特色として示した。その一点は父・兼通の切望と、その子・朝光の現実との乖離である。朝光は、祖父・右大臣師輔に倣わせたいとの父・関白兼道の期待を一身に受け、師輔の任官に倣った昇叙を重ねて行く。だが父・兼道の切なる願いにもかかわらず、朝光は堀河一族の「師輔」にはなりえなかった。「栄花物語」ではこのような朝光を、ひ弱な貴公子・貴人として描く。父・関白兼道や、姉・中宮皇子の死に際し、ただなすことも無く、嘆き悲しむことしかできない大納言、左大将として描いている。ただし朝光の周囲には、師輔にとつての安子、即ち、国母となった女性が、姉妹にしろ女にしろいなかった厳然たる事実もあるのだが。

その二点目は、円融天皇と朝光の関係である。円融天皇との関係では両者は大変親しく、密接な関係を強く浮き立たせるような叙述がなされていた。事実、父・兼通は円融天皇の関白であり、姉・皇子は円融天皇にとつて最初の中宮であった。円融天皇と堀河一族の関係は朝光以前に既に深いものがあつた。朝光は円融院の別当に補されるなど、その関係は浅からぬものがあつたのではあるが。

「栄花物語」の中において記される藤原朝光像を考えるに当って、前回では触れ得なかつたが、もう一つ欠くことの

できないものがある。それは藤原朝光の結婚にまつわる叙述である。「栄花物語」巻第二「花山たづぬる中納言」の中で数節註三にわたり、朝光の女・姚（姫）子の入内を詳細に記した部分がある。その語り初め、冒頭部分に該当する「三三〇節、三三七」節で朝光の結婚と再婚について詳しく触れている。また巻第三「さまざまのよろこび」の「一一六」節の中においても朝光の婚姻について記す。そこでは、巻第二の「三三六」、「三三七」節を受けて、藤原朝光の求婚の失敗と、それとは対照的な、藤原道長の結婚が描かれている。

「栄花物語」における、この藤原朝光の結婚と再婚にまつわる記事は、「栄花物語」独自の記事と行って良いものであろう。何故ならば「大鏡」では流布本系にのみ、巻第二の「三三六」、「三三七」節とは同様の、朝光の再婚の顛末が記されはいる。だが、東松本等の古本系「大鏡」にはこの記事は見られない。さらに、巻第三の「一一六」節で描かれる、朝光の左大臣源雅信の女・倫子に対する求婚の失敗と、藤原道長の結婚については、「大鏡」では古本系にも流布本系にも見られないのである。「栄花物語」独自の記事と行って良い。

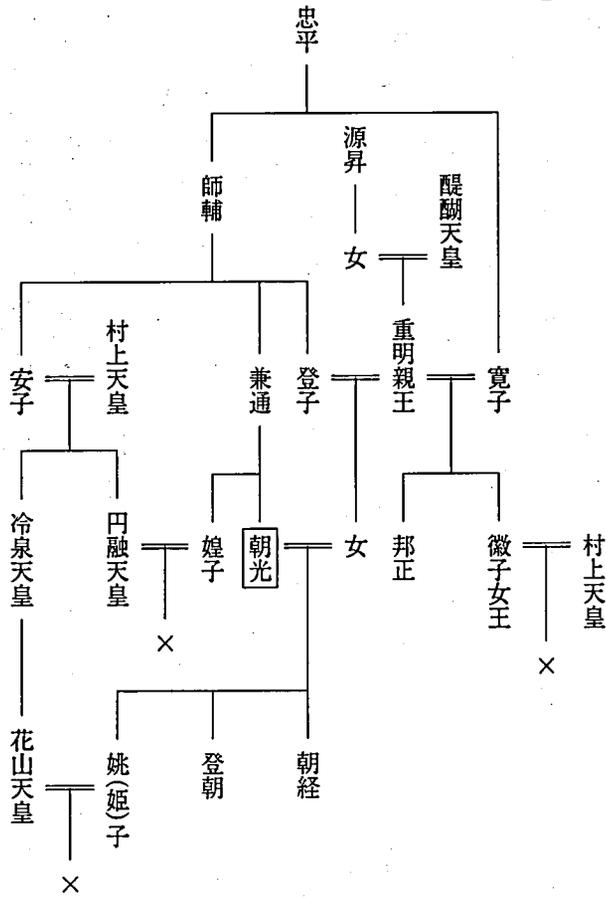
このような観点からすれば、藤原朝光については、彼の結婚にまつわる諸々の叙述に検討を加えなければ、「栄花物語」における藤原朝光の本当の姿が見えてこない。そこで本論では、昨年の拙論に引き続き、この藤原朝光の婚姻をめぐる「栄花物語」の叙述に焦点を当てて、「栄花物語」における藤原朝光像の特色を考察した。

一、藤原朝光の最初の結婚

藤原朝光の北の方は、朝光の従姉妹である。式部卿重明親王註三の五女で、貞観殿の尚侍・登子の腹になる。登子は祖父・師輔の女であり、村上天皇の中宮・安子や兼通の同腹の妹である。即ち登子は朝光の叔母に当るのである。一方、重明親王は醍醐天皇と左大臣源昇の女との間に延喜六年（九〇六）に誕生し、天曆八年（九五四）没している。重明親王は最

初藤原忠平に婿取られ、その女・寛子と結婚し、村上天皇の女御・微子女王等の父となっている。そしてその後、寛子の姪にあたる師輔の女・登子と結婚した(系図I参照)。

系図 I



こういった重明親王の婚姻関係を見てゆくと、彼は帝とは別に、摂関家の中に深く取り込まれていった親王であることがわかる。重明親王は忠平に婿取られ、次いでその次男・師輔の女・登子と結婚しているのである。重明親王は、師輔一族の身内といって良い位置関係にあった。朝光はこのような一族で守り立てていた、重明親王の女と結婚している

のである。この辺りのことを「栄花物語」では、巻第二「三六」節の中で、朝光と重明親王の女との間に誕生した、姚子の入内に絡めて次のように記す。

ただ今はかばかりにておはしぬべきを、又、「朝光の大將の姫君参らせ給へ」と、急にの給はすれば「いかがせまし」とおほしやすらふに、「東宮は兎におはします。かやうの方にもと思はんには参らせ奉らんのみこそはよからめ。又、この姫君を誰かおろかにはおほさん」など思ほし立ちて、参らせ奉り給ふ。この大將殿は、堀河の三郎、あるが中にめでたきおほえおほしき。今に世に捨てられ給はず。母上は、九条殿の御女登華殿の内侍の督の腹に、延喜のみかどの親王の重明の式部卿の御女におはします。その姫君にて、よにおかしげなる御おほえおほす。えもいはずめでたうおはすなれば、「さりともおろかならんやは」とて、参らせ奉り給はんとおほし立ちて、十二月に参り給ふ。故堀河殿の御宝はこの大將の御もとにぞ皆渡りにたる。故中宮の御物の具どもも、ただこの殿をいみじきものに思ひきこへさせ給へりければ、それも皆この殿にぞ渡りにける。いみじうめでたくて参らせ給へり。

〔本文は松村博司著「栄花物語全注釈」角川書店による。以下同じ。〕（二）一七四頁。

父・兼通が薨去し、関白は小野宮流の藤原実頼が就任しており、すっかり世の中が移り変わった後のことである。朝光は女・姚子のことを「誰かおろかにはおほさん」と入内を思い立った。その理由として「堀河の三郎、あるが中にめでたきおほえおほしき」と記す。姚子の父・朝光に信望があったことを先ず掲げる。次いで姚子の母の出自を詳細に叙述するのである。姚子の母については、まず「母上は」とその母系から述べ始める。そして「九条殿の御女登華殿の内侍の督の腹」と、師輔の女・登子の生んだ子であると、姚子の祖母、曾祖父までを記す。ついでその父系に及び、姚子の祖父、曾祖父に言及し「延喜のみかどの親王の重明の式部卿の御女」と、醍醐天皇の御子である式部卿重明親王であったと記すのである。このように両親の素晴らしい、目眩めくような出自の良さを先ず提示するのである。そして、その

様な素晴らしい血筋であるから、疑いもなく「よにおかしげなる御おほえおはす。えもいはずめでたうおはす」と大変な誉めようをするのである。ここで注目すべき点は次のことである。

姚子の母・朝光の北の方の出自を記す場合、単なる重明親王の女では、作者は語り尽くせない、言い足りないのである。父のほかにその母の出自にも言及しなければ、作者の気が収まらなかつたのである。あるいは作者にとつては、母の出自を是非とも記しておかねばならぬ必然性があつたのではないか。加えて、父ではなくその母の出自から語り始めた点は注目に値しよう。作者はその母が、九条殿・師輔の女であつた点をなによりも強調したかつたのではないか。この描き方は「栄花物語」の特色の一つである、「師輔に対する賛美^{註四}」という始点に立つた描かれ方に即したものでないか。この辺りの描き方は「大鏡」では混乱している。

(イ) 北方には、貞観殿の尙侍の御はらの重明の式部卿のみやの御なかひめぎみぞおはせしかし。

(一五七頁。本文は岩波書店、日本古典文学体系による。
二とわりが無い限り「大鏡」の本文はこれによる。)

(ロ) もとの北の方重明の式部卿の宮の姫君、貞観殿の尙侍の御腹、やむごとなき人と申しながら、かたち、有様めでたくおはしけるに、

(二三〇頁。本文は小学館、
日本古典文学全集による。)

(イ) は、閑院の左大将朝光の北の方とその子供たちを記した個所で、古本系の東松本「大鏡」の記し方である。

(ロ) は、朝光の後妻・延光の北の方と先妻・登子の比較をした個所で、流布本系「大鏡」独自の記事で、そこにみられる記し方である。

(イ) は、朝光の北の方・姚子の母の出自を記す個所で、「栄花物語」の描写と類似関係がある。^{註五}とされる部分である。ここでは、「栄花物語」の如く、母の出自を先に記す。一方、(ロ) の流布本系独自の記事の中では、父の出自を先に記し、父母の出自を記すことに関しては、「大鏡」の中では一貫性が無い。また、母についても(イ)(ロ)共に

「貞観殿の尚侍」と登子については記すが、師輔には言及しない。

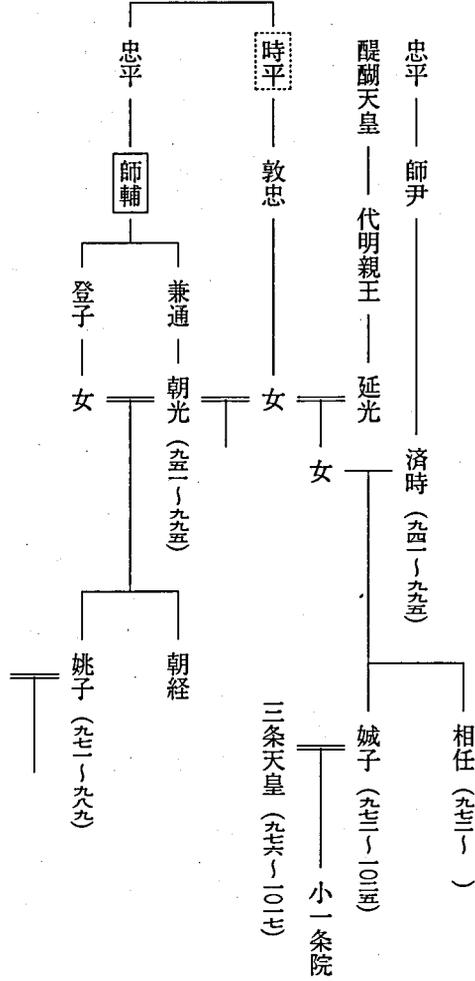
誰の子供かという場合、その多くは父系の方に言及することが多い。だが、「栄花物語」では朝光の北の方の場合は、母系に言及しあまつさえ母の出自を父の出自より先に記すのである。母の系統を優先していると言えないか。「大鏡」と比較した場合、「栄花物語」の作者は姚子の母に関して、師輔の孫であった点を強調したかったのであろう。朝光もその北の方も共に師輔の孫であるから、朝光は「今に世に捨てられ給はず」大切にされていたと言うのである。であるからこそ、その二人の間に生まれた姚子の評判も高く、称賛されていたと描くのである。

一、藤原朝光の離婚と再婚

朝光は「栄花物語」の作者の賛美してやまない師輔所縁の北の方を捨て、故大納言延光の北の方の元に通うようになったのである。このことは作者にとって由々しき問題ではなかったか。師輔所縁の北の方から朝光を奪った、延光の北の方は作者にとって許しがたい人物となつたのではないか。この延光の北の方は、左大臣時平の息・権中納言敦忠の女であり、師輔の一族とは縁も所縁も無い人物であった。時平は「大鏡」「左大臣時平」伝において「あさましき悪事を申をこなひたまへりし罪により、このおとゞの御末はおはせぬなり」(第二卷、七九頁)と記されている一族の女性である。北野の天神に睨まれ、子孫が絶え絶えになつている時平の一族の女性であった(系図Ⅱ参照)。

「大鏡」「左大臣時平」伝はそのほとんどが、北野天神・菅公に対する時平の讒言と、その結果時平一族の寿命が縮まつたという、北野天神の祟りを記すことに費やされている。朝光がよりによって、再婚相手に延光の北の方・敦忠の女、即ち時平の一族の女を選んだことは、作者にとっては禍禍しいこと甚だしかつたのではないか。北野天神が敦忠の女を通して、何時どのような形で、恐ろしい祟りをなすかわかつたものではないのである。後妻として通うのに、これ

系図 II



以上恐ろしい相手はいない。係わり合いにはなりたくないとさえ言えよう。『栄花物語』巻第二(二三七)節の中で、この辺りのことを次のように記す。

この母宮には殿は今も御心かはりて、枇杷の大納言のおみつの北の方は、故敦忠権中納言の御女なり、それに大納言やせ給ひて後はおはし通ひて、この上をばただよそ人のやうにておはするに、男君達二人この姫君とおはすれば、何事もやん事なくぞ思ひ聞こえ給へれど、さやうの事は同じ所にて扱ひきこえ給はんこそよけれ、よそよそにはならせ給へり。かの枇杷の北の方いみじうかしこうものし給ふ人なり。この上は児のやうにおはしければ「いかに」とのみ世のいひ思へり。小一条大将の北の方も、この枇杷の大納言の御女におはしければ、いとおとなおとなし

き御継女の程などを、世の人内内には聞ゆべかめれど、おほかた大将の御おほえのいといみじければ、人も聞えぬなるべし。「御母ばかり」とぞいはれ給ける。
(七五頁。一)

この朝光の後妻に対して『栄花物語』では、「いみじうかしこうものし給ふ人」とする。この点は注目し値するのではないか。「かしこ」は畏・恐とも書き、自分の力では及びがたい気持が含まれており、賢いとしても畏怖の念や、恐れが強い。そこには当然菅公の崇りという、恐怖の影もちらついたのでないだろうか。それに対して、元の北の方・登子の女の方は「兎のやうにおはしければ「いかに」と世間の人々の心配をかつているのである。年老いた、老獺・老練な延光の北の方にすれば、登子の女から朝光を奪うことなど、赤子の手をひねるより簡単なもので、世間では勝負にならないと心配したとある。後妻は大層恐れられ、元の北の方はとても同情されたのである。

閑院の大将朝光は、子供のような本来保護すべきひ弱な北の方を捨てて、「かしこ」い女性を後妻にした。朝光は非難されるべき態度をとったことになろう。だが非難されず「おほかた大将の御おほえのいといみじ」かったと記すのは、大将という彼の重々しい地位、それと彼が師輔の一族であつたからではないか。朝光はこの後も、九条・師輔の子孫の一人として『栄花物語』巻第三(三〇)節の中で「堀河の左大将、ただ今も昔も今もいとやむごとなき御有様なり」と記されるのである。師輔の子孫で大将でなければこのようなことは許されるはずもないことではなかつたか。作者はそう言いたかつたのである。

一方『栄花物語』の作者は、延光の北の方に対しては、全く良い感情を抱いていない。悪意・毒を含んだ描き方である。このことは、花山天皇の姝子への寵愛が理由もなく突然衰えた、おぼつかないはかない関係を記した巻第二(三二)節の中に如実に記される。

閑院の大将殿の女御の御宿直怪しうかれがれになりて、はては、「のぼらせ給へ」といふ事思ひかけずなりぬ。た

はぶれの御消息だに多得果てて一二月になり行く。「あさましう、いかにしつる事ぞ」など大将よろずにおほし惑へどかひなくて、人笑はれにいみじき御有様にて、同じ内におはします人のやうにもあらずなりはてぬれば、しばしこそあれ、人目も恥しうて、すべなくてまかで給ふを、いささか御出入をだに知らせ給はずなりぬ。あさましういみじう心憂き事には、ただ今世にこの事よりほかに申し言ふ事なし。大将殿も、「内へ参れば胸いたし」とて、かき籠り居給ひぬ。世の例にもしつべし。「御継母の北の方のいかにし給つるにか」とまで、世の人申し思へり。みかどの渡らせ給ふ打橋などに人のいかなるわざしたりけるにか、我ものほらせ給はず、上も渡らせ給はず、目もあやに珍かにてまかで給ひにしかば、その後「さる事やありし」といふ事ゆめになし。なにをかきみなども絶えて参り給はずなりぬ。世の例にもなりぬべし。

(八二) 七
八九頁

人望の大変優れた「おほえめでたい」大将が、後妻のもとに通つた結果が、女・姚子に対する花山天皇の寵愛が急に衰えるという、誠に浅ましい状態になつたのである。世間の物笑いの種になつてしまつたのである。大将自身参内しても世間に合わせる顔がなく、家に引き籠もつてしまつたという状態に陥つた。また大将の男「なにをかきみ」なども結果が無様で恥ずかしく、宮中へは「絶えて参り給はずなりぬ」状態になつた。

このような結末にたいして、『栄花物語』の作者はその原因を成したのは、姚子の継母となつた延光の北の方を疑う。延光の北の方が「いかにし給つるにか」と疑うのである。本当に継母がなにか空恐ろしい策謀でもしたのであるか。何先妻の子・姚子に対するいじめ、花山天皇の寵愛を奪うような策謀は、朝光の後妻にとっては何の利益になるか。何の利益にもならないのではなからうか。だが『栄花物語』の作者は朝光の後妻・姚子の継母に疑いの眼を向けるのである。それとも延光の北の方は、済時の女で自分の孫になる城子をも、花山天皇の後宮に入れようとして、なにか陰謀でも巡らしたとも言いたかつたのであろうか。

ここでは作者は一言も朝光に同情はしていない。実はここでこのような空恐ろしい後妻のもとに通った朝光を、結局物笑いの種にしているのではないか。師輔の孫女を捨て、いろいろな意味で空恐ろしく底知れない、ねびた延光の北の方・敦忠の女のもとに通った結果が「世の例にもな」ってしまったという、最悪の結果を招くこととなったのである。朝光は世間で大恥を搔く結果と成った。みっともなく見るに耐えないと書き立てたのである。朝光は左大将という頭官を務め春宮大夫等要職を歴任している、絢爛たる目も眩むばかりの貴人である。作者はそう言った一角の立派な人物・貴人を、物笑いの種にしてしまったのである。

『栄花物語』の読者は多分、師輔の子孫ともあろう者がつまらぬ再婚をしたものだ、期待の大きかった反動で、がっかりとした感想を抱くのではないか。あるいは師輔の子孫であっても、朝光のようなできの悪い人物がいたものよと、慨嘆するのである。『栄花物語』の作者は、前半では大いに朝光のことを持ち上げ、後半では一転して朝光の見識を疑うのである。底意地の悪い描き方ではないか。朝光をおとしめ・けなすには、誠に効果的な描き方であるといえよう。

三、朝光の倫子への求婚

『栄花物語』巻第二〔三九〕節を受けて、巻第三〔一六〕節では主に、藤原道長と源倫子の結婚の詳細が語られている。そこでの主題は、源倫子の婿に藤原道長を迎えたのは、倫子の母・藤原穆子であると記すことにある。この件に關しては以前拙論を展開した^{註六}ことがある。そこでは朝光の倫子への求婚が主題ではない。藤原道長と源倫子の結婚に当たって、巻第三〔一六〕節の中で狂言回し的な、損な役割を担って登場するのが藤原朝光である。「閑院の大将」朝光の役割は、まさに「三位殿」道長の引き立て役以外の何物でもないのである。重責を担った三十七歳の大将が、たかが二十二歳の若い三位に求婚の場で敗退するのである。大将の求婚を蹴って三位を婿に迎えた、母の見識をたたえるのが

目的である。

『栄花物語』卷第三(一六)節の中において、閑院の左大将・藤原朝光は次のように記される。

かくてこの母上、この三位殿の御事を心づきにおほして、ただいそぎに急がせ給ふを、殿は心もゆかずおほいたれど、ただ今のみかどいと若うおはします、東宮も又さやうにおはしますば、内、春宮とおほしかくべきにもあらず。又さべい人などの、物物しうおほすさまなるもただ今おはせず。閑院の大將などこそは、北の方年老い給て、ありなしにて聞えなどすめれど、かの枇杷の北の方などの煩しくて、この母北の方聞しめしいれず。ただこの三位殿を急ぎたち給て、婿どり給ひつ。その程の有様、いとわざとがましくやむ事なくもてなしきこえ給へれば、摂政殿、「位などまだい浅きが、かたはらいたき事。いかにせん」とおほしたり。
(三五頁)

倫子の父・左大臣雅信は年端もゆかぬ若い三位を婿に迎えるのを躊躇している。はかばかしい婿の適任者がおらず、閑院の大將位かと父は諦める。道長にしても朝光にしてもその血筋は師輔の孫という点では、甲乙つけがたい(系図Ⅲ参照)。

だが倫子の母・藤原穆子の意向により、左大将がただの三位に求婚で負けてしまうのである。誠に惨めで無様な左大将・藤原朝光像が描かれているのである。藤原朝光は『栄花物語』卷第三(一六)節の中において、徹底して男を下げるのである。その原因の一つが「北の方年老い給て、ありなしにて聞えなどすめれど、かの枇杷の北の方などの煩しくて」と、朝光を婿に迎えることが母・穆子によって反対されるのである。

系図Ⅲ



朝光がこの時、左大臣雅信の女に求婚するということは故無しとはしない。朝光を含む堀河一族と源雅信の関係は、関白兼通の生前は比較的友好的であったと考えられる。天祿三年(九七二)十一月に兼通が政權を握ってすぐに行つたのが、一品資子内親王が年官年爵を賜ること註七であった。これは円融天皇と兼通が意を通じて行つた最初の政と言つてよかつた。翌天祿四年正月七日の叙位では、雅信の一男・時中が、一品資子内親王御給を授かり、正五位下より従四位下に昇叙する。註八一品資子内親王が年官年爵の行使をし、喜びを与える相手に雅信の息子を選んだのは、ただの偶然とはいえない。兼通の意向を汲んだ上でのことである。抜けが多いと思うが被見した限りでは、翌天延二年(九七四)正月七日の叙位では兼通の息・朝光が一品資子内親王御給を授かつて註九いる。その後も「公卿補任」の尻付きを調べた限りでは、天延二年十一月には藤原誠信、天延三(九七五)年正月には藤原道隆と摂関家の人々と関係の深い人々がその喜びに預かつている。また、寛和二年(九八六)十一月には、朝光の息・朝経が十四歳で従五位下に叙されている。註十一品資子内親王御給を授かつている人物は堀河一族や摂関家の人々と関連が深いのではないか。

関白兼通はまた、貞元二年(九七七)四月二十四日に誠に強引なことを行う。それは左大臣源兼明を親王に戻し、その空きを埋めるといふかなり無茶な大臣の任命を行つたのである。その時、右大臣には大納言源雅信が任せられたのである。註十一兼通は強引に雅信を右大臣に任命したといえる。この時同じく昇進しているのは、同年条の「公卿補任」によると、兼通の異母弟の藤原為光が中納言から大納言に転じ、息子の朝光が中納言から権大納言に、同頭光が参議から権中納言に、源重光が参議から中納言に転じている。兼通は自分の権力基盤を強化するために、兼明親王の憤り註十二をかつても一族のもの、親しい源氏の昇進を強引にすすめたのである。

堀河一族の長の兼通が、源雅信並びにその息子の昇進を図っていたのである。とすれば雅信が朝光に親しい感情を抱いて、娘の婿にと一時考えた可能性も全く皆無とはいえない。しかしこの件は穆子の考えで潰えたのである。その理由

が、朝光の後妻・枇杷の北の方との関係が煩わしいということで決着したのである。延光の北の方はいつまでも朝光の足を引っ張るのである。そこで『栄花物語』巻第二(三七)節を思い起こすのである。そして納得するのではないか。作者は、ここであのような笑い物を婿に迎えなかつた、母穆子の見識を称賛しているのではないか。

四、『大鏡』に描かれた再婚

一方『大鏡』ではこのような描き方はしない。古本系の東松本『大鏡』では、先ず朝光が延光の北の方を後妻にして通つたという記事そのものが記載されていない。『栄花物語』巻第一(三七)節に描かれる、朝光と延光の北の方との再婚話は、最初からもととなかつたのか、それとも書き留めておく必要性を認めなかつたかのどちらかであろう。古本系『大鏡』では、朝光の延光の北の方との再婚話は記されていないが、朝光の女・姚子と花山天皇の顛末はしっかりと記しているのである。先に「一、藤原朝光の最初の結婚」の個所で引用した(イ)に引き続き、次のように記している。

その御腹に、おとこぎみ三人、女君のかゞやくごとくなる、おはせし。花山院の御時まいらせたまひて、一月ばかりいみじうときめかせ給しを、いかにしけることにかありけん、まうのほりたまふ事もとゞまり、みかどもわたらせ給ことたえて、御ふみだにみえきこえずなりにしかば、一二月さぶらひわびてこそは、いでさせ給にしか。またさあさましかりしことやほありし。御かたちなどのよのつねならずおかしげにて、おほしなげくも、みたてまつりたまふ父大納言・御せうとのきみたち、いかゞはおほしけん。その御一腹のおと、君三所、太郎君は、いまの藤中納言朝經の卿におはすめり。人にもおもくおもはれ給へるめり。

〔大鏡〕第三卷「太政大臣(兼通)」伝 一五七―一八頁。

ここでは『栄花物語』巻第二(三三八)節から、(三三九)節の十一行目までと同様の事が記されている。だが(三三九)

節の十一行目の「御継母の北の方のいかにし給つるにか」以下の六行にわたる叙述と同様の記事は無い。「大鏡」には、花山天皇と姚子の間を割いたのは、継母となった延光の北の方ではなかったか、なにか陰謀を巡らせたのではないかと言うような、延光の北の方を疑うような記事はないのである。

「大鏡」では花山天皇のあまりにも激しい気持の変動、掌を返したような姚子に対する処遇の変化に「さあさましかりしことやありし」と驚いている。この驚きの感情は、花山天皇の態度に向けられたものであろう。「大鏡」の作者は姚子について「かゞやくごとくなる」とか「御かたちなどのよのつねならずおかしげ」とか、盛んにその美しい容貌を誉め称えている。そして、兄弟の朝経に対する世間の良い評価、即ち「人にもおもおもはれ」た様子を引き続き記すのである。これは、花山天皇の余りに無責任な態度に、姚子は言うにおよばず、朝光や姚子の兄弟に対して、深く同情している描き方ではなからうか。

「大鏡」の作者は、花山天皇の姚子に対するこのような態度の変化の裏に、延光の北の方の陰謀があったなどとは、全く記事として取り上げていない。それよりはこのような態度をとる花山天皇の資質を疑っているのではないだろうか。朝光が後妻・延光の北の方のもとへ通った記事は、古本系「大鏡」には無く、流布本系「大鏡」に採られた記事である。また、そこにみられる内容は、「采花物語」とは全く趣を異にする。流布本系「大鏡」で語られる延光の北の方とは、花山天皇の姚子に対する、掌を返したような姚子に対する処遇の変化には全く係わっていない。ただ延光の北の方を描くことで、朝光が笑い物にされている点だけは共通するのである。

この閑院の大将殿は、後にはこの君達の母をばざりて、枇杷の大納言延光の卿のうせたまひにし後、その上の、年老いて、かたちなどわるくおはしけるにや、ことなること聞こえたまはざりしをぞ住みたまひし。徳につきたまへるとぞ世の人申しし。さて、世覚えもおとりたまひにしぞかし。もとの上、御かたちもいとうつくしく、人のほど

もやむごとくおはしまししかど、不合におはすとて、かかる今北の方をまうけて、さりたまひしぞかし。この今の上の御もとは、女房三十人ばかり、裳・唐衣着せて、えもいはずさうぞきて、すゑ並べて、しつらひ有様よりはじめて、めでたくしたてて、かしづききこゆることか。(中略) おほかたのしつらひ・有様、女房の装束などほめでたけれども、この北の方は、練色の衣の綿厚き二つばかりに、白袴うち着てぞおはしける。年四十余ばかりなる人の、大将には親ばかりにぞおはしける。色黒くて、額に花がたうち付きて、髪ちぢけたるにぞおはしける。御かたちのほどを思ひ知りて、さまにあひたる装束と思しけるにや、まことにその御装束こそ、かたちに合ひて見えけれ。さばかりの人の北の方と申すべくも見えざりけれど、もとの北の方重明の式部卿の宮の姫君、貞観殿の尚侍の御腹、やむごとなき人と申しながら、かたち、有様めでたくおはしけるに、かかる人に思しうつりて、さりたてまつらせたまひけむほど思ひはべるに、ただ徳のありて、かくもてかしづききこゆるに、思ひのおはしけるにや。

(流布本系「大鏡」「太政大臣」
兼通)伝、三二八―三三〇頁)

流布本系「大鏡」では、朝光が延光の北の方のもとへ通つた理由を「徳につきたまへる」と、その財産に心が引かれたのだと記す。朝光がもとの北の方と別れた理由を「不合におはす」と、彼女が貧しかったからであるとす。朝光は財力に執着した人物として造形されているのである。その結果、朝光の評判は「おとりたまひにしぞかし」と、地に落ちてしまったのである。「大鏡」の作者は、もとの北の方を、美しくその生まれもとても貴くて素晴らしい、だが貧しかったと記す。一方新しい北の方は、朝光の親ほどの年齢で年老いており、容貌も悪く額に痘痕があり、髪も縮れ毛で見苦しかった。だが財産があり豊かであったと記すのである。「大鏡」の作者は朝光の、新旧の北の方を、誠に対照的な正反対の属性をもった女性として造形した。そうした描き方である。

流布本系「大鏡」では新しい北の方の裕福な状況を、財力にあかせて立派な室内装飾をしたり、女房三十人に立派な

装束を着せていたとかと描く。延光の北の方に対しては、繰返し「ただ徳のありて」と、裕福であったことを強調する。また延光の北の方は、自分の年齢や容貌のことを良く自覚していたように描いている。そこで、朝光のことを下へも置かぬ持て成しをして、気を引いていたと記すのである。冬などは暖房に気を使い、朝光の衣装や寝具を温めるなど大変気を使っている姿を、面白おかしく描く。ある面では大変分をわきまえた、利口な女性であるといえよう。

このような点はこのあと引き続き語られ、次の逸話にも顕著に見られる、新しい北の方の性格である。

さて、時々、もとの上の御もとへおはしまさむとて、牛飼・車副などに「そなたへ車をやれ」とて仰せられけれどさらに聞かざりけり。この今北のかた、侍・雑色・隨身・車副などに装束くもの取らすことはさるものにて、日ごとに酒を出して飲ませ遊ばせ、いみじき志どもしける。その故にや、かくしけるをそれまいたとあやしき御心なりや。雑色・牛飼の心にまかせて、それによりてえおはしまさざりけむよ。さることやは侍るな。

(流布本系「大鏡」
三三三頁)

誠に世古にたけた、下々のものにもで行き届いた気配りをする賢い北の方である。将を射んと欲すればまず馬を射よの諺どおりの対応をした人であると描く。朝光を我家に通わせるにあたり、まず牛飼の童や雑色・隨身といった身分の低い者どもを酒食で買収したのである。季節ごとの着物は言うに及ばず、尋ねてきた日には必ず酒を飲ませて遊ばせ、素晴らしい心づけを彼らに与えたというのである。そこで家来たちはこの、素晴らしい魅力的な路・贈物に心引かれて、主人である朝光の、もとの北の方のもとへ行けという命令は全く無視する。そして、なにくれと心遣いをしてくれる新しい北の方のもとへ朝光を連れていったと、面白おかしく描くのである。そうしてこのような下働きの家来を叱責もせず、彼らの意のままにだらしなく、裕福な新しい北の方のもとへと通う朝光を、笑い物にしているのである。

流布本系「大鏡」の中で描かれた朝光は欲得に負け、新しい北の方を妻にした人物として「世覚えもおとりたまひに

しぞかし」とか「この今北の方のことに、世の人にも軽く思はれ、世覚えもおとりたまひにし」(二三一頁)と人望が地に落ちてしまったと、繰返し描かれるのである。朝光は笑い話の主人公になってしまった観があるのである。かたてて加えて自分の使用人一人確りと暮ることも、掌握することもできない人物として、馬鹿にされ笑われているのである。

結

このように見てみると『栄花物語』では、九条殿・師輔の子孫としての属性が強い箇所では、閑院の大将朝光は素晴らしい人物として描かれている。だが一端、出自を離れて朝光個人に係わる要素が強くなると、途端に見識の無い、だめ男になってしまう。即ち、朝光が師輔の孫女を離別し、延光の北の方のもとへ通うという再婚話になった途端、朝光は物笑いの種となっているのである。

『栄花物語』の読者は師輔の子孫とあろう者が、全くつまらぬ了見を起こして、分けのわからぬ再婚をしたものだと慨嘆するのである。時平の子孫などという素性の怪しい、それも年上の女性と再婚したから、姚子と花山天皇との関係が潰えたのであると朝光を非難するのである。延光の北の方などという女性と再婚しなければ、姚子の悲劇は起きなかつたと説くのである。閑院の大将ともあろう者がと、その見識を多いに疑っているのである。

一方『大鏡』の方は古本系では、朝光と延光の北の方の再婚話など全く記されていないのである。姚子と花山天皇の悲惨な結末は記しているが、『栄花物語』の如くその原因を、延光の北の方の策謀であるかと疑うような記事はないのである。当然であろう。朝光の再婚話は古本系『大鏡』では採用されていないのであるから。

朝光と延光の北の方の再婚話を記す、流布本系「大鏡」でも姚子と花山天皇の悲惨な結末を、延光の北の方の策謀であるかと疑うような記事はないのである。ただしこちらは、別の意味での物笑いの種となった朝光像を描写する。それは朝光は財力に執着した人物として笑われているのである。そしてまた、確りものの年上の女房と、使用人たちに馬鹿にされきっている大将の落差を描いている。自分の使用人一人確りと駢ることも、掌握することもできない人物として、閑院の大将朝光は、馬鹿にされ笑われているのである。

「栄花物語」と「大鏡」の閑院の大将朝光の叙述を比較すると、「栄花物語」では新しい北の方をなにか得体の知れない恐ろしいな人物として描いている。そして古い北の方を捨て新しい北の方のもとへ通う朝光を非難し、最後はその結果として女・姚子の悲惨な結末を迎えた父朝光を、笑い物にしているのである。そしてこの再婚の影響は、巻第三にまで及び結局は藤原道長の引き立て役として朝光は登場するのである。一方「大鏡」では流布本系にのみ朝光の再婚話を取り上げられていることが先ず注目される。そしてそこでの新しい北の方は、自分の年齢や容姿を良くわきまえており、大変しつかりした女性として描かれている。それに対する朝光は財産に目の眩んだ大将、使用人にまで馬鹿にされきっている大将として描かれているのである。

藤原朝光は、同じ笑い物として描かれているが、両書はその内容が全く異にしている。流布本系「大鏡」では欲に眩んだ貴公子と、下人を引き込み彼を手玉に取る年上の後妻として、十分笑い話として完結した描かれ方をしている。それにはたいして「栄花物語」では師輔の一族ではあっても、その一族を大切にしない者の結末は、悲惨な笑い物として描かれるのである。そして師輔の孫である道長を引立てる役割を十分に果たしている。

註 一 「栄花物語」における藤原朝光像その叙述の特色」（信州豊南女子短期大学紀要第十二号・平成七年三月）

註二 本論では「栄花物語」の内容を各巻ごとに「節」で区切っているがこれは、松村博司著「栄花物語全注釈」

(角川書店)の中で使用されている「」節に準拠している。本文の引用も以下同じ。

註三 「二代要記」「花山天皇後宮」条に「女御無位藤姫子 大納言朝光一女、母式部卿重明親王五女」とある。

註四 松村博司著「栄花物語全注釈」(二)一七九―一八〇頁、巻第一(二二六)節の補説「師輔贊美」

註五 橘健二校注「大鏡」(小学館、日本古典文学全集)二二七頁、頭注*

註六 「栄花物語」に於ける道長の結婚像―穆子の位置―(信州豊南女子短期大学紀要第二号・昭和六十年三月)

註七 「日本紀略」天祿三年(九七二)十一月十六日条。

註八 「公卿補任」寛和二年(九八六)「源時中」条尻付き。

註九 「公卿補任」天延二年(九七四)「藤朝光」条尻付き。

註十 「公卿補任」長和四年(一〇一五)「藤朝経」条尻付き。

註十一 「詔以左大臣從二位源兼明朝臣。正四位下行右兵衛督同昭平朝臣等爲親王即敍品。兼明二品。昭平四品。」「日本紀略」四月二十一日条、「任大臣宣命。右大臣藤原朝臣頼忠爲左大臣」。敍正二位。大納言源朝臣雅信爲右大臣。」「日本紀略」四月二十四日条、「公卿補任」同年条。

註十二 「本朝文粹」「兔裘賦」に「執政者に枉て陥れらる。君昏く臣諛ひて愬ふるに處無し。」(日本古典文学大系による)とその無念の条を吐露している。